銀鈴第拾五號（毎月一回二十日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治三十九年八月二十七日發行

第拾五號

# 銀鈴第拾五號掲載要目

禁　轉　載


葉月集（短　詩）……蝸　牛（俳　句）……祝羽風選
その一……奥原碧雲　秋の花（長　詩）……野　花
その二……三明一笑　紅　雪（美　文）……吉野櫻里
その三……松田松葉　懸賞讀者募集……
その四……千代延春圃　若　葉（俳　句）……奈倉梧月選
その五……福田紫雲　「明星」と「藝苑」（評論）……袖　影
その六……河野素陽　新　調（俳　句）……白扇等
その七……森脇桃村　新刊批評……
その八……河野翠瀛　控へ帳（雜　文）……
曉（美　文）……はつなつ人　廣　告……



銀鈴

第拾五號　明治三十九年八月二十七日發行


## 葉月集

奥原碧雲

牡丹ちる夕有髪の雛僧にあやにく誦せしうたぬすまれし

くれなゐに緋にむちさきに戀に名に色ふさはしき温室の夏花

風清し欄による子の水色の紹蚊帳の裾にふさはしの夢

蚊やり火に人なつかしき宵やみをもきすぎがたきもふ顔の宿

うるはしき七色虹のかげのごと人なつかしき
あけぼのの空

三明一笑

白百合をひとえだとるときりぎしに日すがふ
あさりゐたまふ君よ
待ちわぶる子ありとも ふべひんがしに文して
やりぬ堪へがたければ

松田松葉

おもふ夜はさびしけれども窓れしぬ萩ふく風
のなつかしくして
ききなれぬ人の聲して夜の街をあまた行くな
り事あるらしく
初秋風、み堂につづく數人のうすふ弥地の五
條袈裟ふく



青葉若葉海のいろせる森の上に白帆のごとく
二十日月しぬ

千代延春圃

さびしさに我たたずめばほととぎすああ鳴き
過ぎぬ大野の果を
夕月夜ぶだうの露のこぼるるや君は小窓によ
りてれはさむ
六月の强雨のあとの朝晴の日は薄黄しぬ菖蒲
さく池

福田紫雲

れほ夏や湖の最中に白帆しぬ君はかいなを手
枕にして
夏の月高樓てらす朝あけを蚊帳してききぬ初
ほととぎす

## 河野素陽

雲の峯破船のさましし天上に立ちぬ風なき八月の晝

朝かぜは青田そよがし裏町をすぎて來りぬわが寢る蚊帳に

## 森脇桃村

きりぎりす媛がやさしき戀歌を金の籠に入れたまひしかども

しめやかに蚊遣くゆれるあづま屋にみづ色ぎぬの人とかたりぬ

## 河野翠瀲

ああ十歩前に君見ぬ天くだけ地ながるると思ふばかりに

君が家君が花摘む野のあたり白くさびしくさす秋の月

君を見ぬとある夜の街植木屋の灯かげに立ちて居たまひし哉

名香はわが身よりする思ひ出の花うつくしく咲ける刹那に

君おもふうれしきときよほととぎすしら蓮舟に霧ながれけり

竹結ひてほどよき構へゐなか屋の萩さく庭に君を見しかな

こころいま野のざれ骨を秋雨のうてるがごとし思ひすてつる

大牛のほゆるに似たり思ひ出の日よ悪性の胸鳴りのして

## 曉

はつなつびと

夜更しの癖、今朝はとまだきに、雨戸開け放ちて風を入る。蚊帳越に見る曉の空、桔梗色に晴れ渡りて、星ちら〳〵と光薄し。

鉢にかゞむ朝顔の、早や咲き出でなん、蕾大きやかなるが、涼しき風にもらぎつる、風情あり。

床ながら腹這ひに頬杖つきて、獨り莫を呑む。げに何ものにも增して、言ひ知らぬ嬉しさをぞ覺ゆるなれ。

蛙なほ昨夜の名殘を音に立てて、太儀や、濁りぬる聲も低し。

けたゝましう鳴きわたる、鳥さへ曉はいと元氣に、彼方ほのぐらき林に入る。家人起き出でつとおぼしく、戸を繰る音のしめやかに。痛々しや右の手痳痺れて。興醒むるばかり苦し。

さや〳〵と蚊帳の裾もるがして、朝風一としきり又ひとしきり、且は前栽の青葉を吹く。途端に、寺の看經の鼓、枕に近う聞こゆるも可し

いつ見てもこは、いとをしきもの哉、檐に棕櫚繩して吊り下げられし葱草、なにがしより、乞ひ得しもの、主人が横着に手入もせぬを、枯れぬや彼の君のたまもの也。

日出づ、高き前山の頂き、きら〳〵と露散るが如く、金色に輝やきぬ。

蚊のうなり遠し。

## 蝸牛

（募集句の一）

第二回發表

祝羽風選

子供等の放ちては取る蝸牛　一笑子

貧しさの軒漏る雨や蝸牛　美童

鑿冷す清水に落ちぬかたつぶり　峰秋

桑苅ればころげ落ちけり蝸牛

雨の日や蝸牛這ふ十王堂　五呑

悠然と富士見上ぐるや蝸牛

蕗の葉の雨に打たるや蝸牛

天

椎茸を作る朽木やかたつむり　五呑

## 秋の花

野花

花さびし、秋の花

白々と水蒸氣

大川の水涸れし

石原のみぎひだり

立ちのぼる。

ゆせがきや川原つゞき

いたつきの詩人すむ

庭の花、秋の畫

さやさやと風ふきて

もらぐかな。

ふべより降りいでぬ

しづかなる雨の音

軒端より川原へと

秋の花、花ことごと

しほれけり。

## 紅雪

吉野櫻里

雪降る、雪降る。

而かも紅の雪が降るのぢやないか。

「なに君は又、科學的の頭で、以てそんな道理がないと斷定するのか、いや、尤もだ。

僕が十五の時であつた。

君は知るまいけれど、僕にはその時三ッ年上の姉があつた。

姉弟だからといふんぢやないが、そりや美しい女であつた。つやゝかな髪を君、島田といふに結つて、白粉を着けるまでもない奇麗な皮膚は、透き通るばかりに匂ふぢやないか。眉は少し凛としてゐたが、眼は活々と風情が罩つて――あゝ戀しいね。

正月の元日、何う思つたか姉は、二楷の六疊の机に向つたもんだ、繰り擴げられたのは、君、「源氏物語」若紫の卷だ。

其讀んでる本を僕が覗き込んだ時、

（あれ、清さん、鶯が啼くのね。）ッていふんだらう。

（姉さん、嘘よ。）といつたものゝ、じッと耳を澄ま

すと、君、ホーホケ――と、そりや幽かに胸に響いたんだ。

れやと思ふと姉さんが居らんぢやないか、驚いたね。障子をかゝり明けて外を見ると、君！雪が紅に降つて、樓が庭に散つてるんだらう。あゝまたその時鶯が啼いたよ。

姉さんは一年病つて死んぢやッた。」

友なる美少年清の君は、斯く余に語つて涙を垂れた。

余も紅の雪は、眞に天より降るものなることを、この人によつて初めて敎へられたのである。（完）

## 次號豫告

次號以下の本誌には新たに時文の一欄を設け縱横の論議を試むべし。而して先輩川上櫻翠氏また稿を寄せらるるの約あり。庶幾くは一段の光彩を添ふるを得む



## ●懸賞讀者募集

一　「銀鈴」半ヶ年分參拾錢以上拂込者には番號券一枚を呈し同時に本社淸規により社友に列す

二　前項拂込者五名以上紹介者には五名毎に番號券一枚を呈す

三　番號券はハガキ若くは切手にて請求せられなば豫め各自の番號を知り置くことを得べし

四　申込期限九月三十日限とし十月の同誌上第拾七號に當籤の番號を報告す

五　當籤者を定むるには松江市內發行松陽新報社山陰新聞社の何れかに抽籤を囑托し之を決す

六　百五十番を以て一組とし一組毎に左の賞品あり

一等　新聞紙三ヶ月　二等　新聞紙二ヶ月
三等　新聞紙一ヶ月　四等「太陽」一冊
五等「文藝倶樂部」一冊　六等「新小說」一冊
七等「文藝界」一冊　八等「帝國文學」一冊
九等「藝苑」一冊　十等「中央公論」一冊

七　賞品は時宜により現金に換ふることあるへし

明治三十九年六月二十日　銀鈴社

## 若葉（募集句の二）

第二回發表

奈倉梧月選

峯つづき風吹き渡る若葉哉　一笑子
兒雀の翼かよはき若葉かな　峰秋
雨禱る籌明るきわか葉哉　美童
若葉蔭肺病む人の歩きけり　美童
若葉路微行の君に隨ひぬ　五呑
神橋を白馬牽き行く若葉哉
町中に神の灯深き若葉かな
若葉山温泉の旗隱見す
拔道を若葉の中に見出しけり

天仙童の曉歩く若葉哉　美童

追吟
馬の子の我に逃げ込む若葉哉

▲懸賞俳句第四回課題

△虫（十句以內）羽風選　○締切孰れも九月三十日
△肌寒（十句以內）梧月選　○投稿本社編輯局宛

## 「明星」と「藝苑」

袖影

「明星」は與謝野寛氏の管する所にして、「藝苑」は上田敏氏自から編輯に從ふと云ふ。

前者は四六二倍版にして後者は菊版なりと雖ども、內容の酷似せる点に見て、われ等は爰に兄弟雜誌の稱を捧げむとする也。

外形は此の如く一見何等相似の点なしと雖も、稿を寄する人々の名が常に両者相等しきがゆゑに、我等は、この二雜誌の各々に於て、特に算すべき何等かの特色を見出し得ざるなり、そは一方の特色異彩と見るべきものは、直に他の特色異彩として顯著なる傾向を現はせばなり。

我等は、試に其の健似せる所を擧げて「小明星」「大藝苑」の興味あるコントラストを讀者の前に展べんとす。夫の衆俗を脫し、超然として、純文學の範圍に樹てると、趣味の高雅なるとは、即ち其の一。

飜譯脚本等の殆んど毎號を通じて、紙面の過半を占むるある、即ち其の二。

寄稿者が概ね茅野蕭々馬場孤蝶栗原古城梧桐夏雄川下江村平野萬里辻村鑑草野柴二森田白楊生田長江氏等、両誌驅持の如く見もる、其の三。

紙質孰れも舶來上等紙を用ゐたる、其の四。

當時流行のカットを用ゐざる、其の五。

批評の對象と結論とが毎に相一致せるが如く想察せらるる、其の六。

巨細に渉らばなほあるべし。然れ共、両誌の各異る点亦少からざるは我等の自ら認むる所なれども、そは極めて細部分の相異なり。

さは云へ、斯の如く俗趣味を容れず、雅致豊かなる方面に、この両雑誌が專ら親睦を持するは我等の羨する所にして、永く東西呼應、かの某々俗輩の跳梁を抑制せんことを望む。

▲短歌募集課題

△夏の海　東京　平野萬里選

△一人十首以内他の投稿と區別して清記せらるべし

△本號遲刊に付締切を九月十日と改む

△本社編輯局宛

## 新調

秋晴や河に沿ひたる四五の家　白扇

秋深し雲ちぎれ飛ぶ北の室　藍雨

川一里小道に秋の水流る　梧堂

訪ふや山門に秋の聲ひびく　五呑

手を拍ては滿山もるぐ秋晩し　梅窓

宵寒き水簾洞や夏の月　神の子

藪の家の灯暗しや夏の月

松の葉の露に光るや夏の月

水亭に句の競作や夏の月

病院のカーテン白し夏の月

山腹に茨咲いて暑き日なり鳧

暫ゆくは看板を見る日傘哉

且つ割れば雫したゝる西瓜かな

湖にそふ小さき宮や青すだれ

蘭賣つて簾を買ふてかへり鳧

茨の花山路を土の匂ひかな

四ッ角を日傘日傘と分れけり

一百の朝顔涼し瀧の茶屋



## 新刊批評

▲五月。三ノ七、八。今少し散文があつて欲しい▲クヂラ。三ノ十一、月兎の「潮吹」に碧梧桐を持ち上けて居る面白い▲えぶき。一ノ十二。笑波生の「不知火」こんなが可い▲俳諧草紙。一ノ四。躰裁の珍に驚く、内容零碎に過ぎはせぬか▲ホノホ。三ノ一。大冊だけれど傑作に乏しい併し編者の勞は多とすべきである眞面目な作よりも卷尾の誌友會記が嬉しかつた柴舟うつぼの歌何れも平板なものだ▲浮城。三ノ十。稻青の「流れ矢」夢拙の「彈の跡」は此の雜誌の特色だ▲若菜籠、二内容未だ稚臭を脱せずだ紙質印刷は極めて美くしい▲山鳩。三ノ八、九。▲藻の花。三ノ六。瀟洒なものだ▲無限思潮。二ノ七▲松の翠三ノ四▲若櫻二ノ七▲琵琶文壇四十二▲菊見新誌五十▲宇宙二ノ三

次號投稿締切九月十日

## 控へ帳

▼能海紫星が「明星」紙上斯の如く活動し初めたるはわれ等の同慶に堪へざる所なり一段の精進を望むこと切

▼月の「明星」蒲鞭に於て金子薫園を笑ひたるげに痛快を極めたるもの哉全躰薫園などが歌人とは以ての外だ

▼伊上凡骨氏の彫技いよ〳〵熟せんとすと云ふ又思ふ新詩社派詩人として有名なる高村碎雨氏いま將た奈何

▼社友にして飯省せるものを擧ぐれば高城七星福田紫雲藤本晩花牧岡馨子河野素陽森脇桃村後藤孤星れよび

▼小川董月木村秋浦三明一笑菅原紅雨等、尚ほあるべし。何れも鄕に入りて讀者若くば創作に餘念なしと云

▼岐阜から出す「山鳩」といふ雜誌に「控へ帳」を「鳩吹」の眞似だとホザいて居る字詰評論が「山鳩」の專有だと

▼か創始だとか思つて居ると見える膽玉の小い事れ咄にならずさ新聞でも雜誌でも二行三行字詰の短評は澤

▼山ある世の中だ先づお手前から目の前の蠅を拂ふてれ出更へなさい。山鳩同人が萬朝報の和歌に當選した

▼と云つて吹聽する相手だもの旭晃の歌に「大樟の盤根」とか「天宮」とか云ふ珍妙な造語が出るも道理さね

## ○廣告

◉あゝ「鈴蟲」は生れぬ!!

◉本誌は全紙悉く色刷にして美的雜誌なり

◉本誌は滿天下青少年諸君のパラダイスなり

◉本誌は懸賞募集有投稿大歡迎

◉本誌は名士の寄稿及讀者の投稿趣味津々たり

◉希くは青少年諸君此際奮て入社あれ

月刊文藝雜誌 **鈴蟲** 社員大募集

一部參錢△六部拾六錢 郵稅貳錢△見本は五錢送

△小說 △評論
△美文 △短文
△和歌 △新体詩
△俳句 △氣焰欄
△一口斷 △ポスト
△此外色々

毎月八切廿日

岐阜縣可兒郡上之鄉村謠坂 硯友社

**俳句募集** 互選以外梧月刄風八重櫻靜處十峯諸兄の特選を經て雜誌「銀鈴」に發表す進んで應募せられたし。

課題 野寺分 紅葉 (秋季結) 五句 十月十日限 八月三十日限 九月二十日限

投吟用紙隨意、廻覽互選に附す。

岡山市磨屋町四〇陽炎會幹事 五呑 富田武次郎

## ○大廉價販賣

「銀鈴」既刊殘部左の通り特別廉價にて販賣す申込を乞ふ

二號五號六號七號九號以上一部四錢

十號十一號十二號十三號 以上一部參錢

銀鈴社

## ●社告

「銀鈴」誌代及び社費前金切の場合は帶封に赤イメキにて○印を附すべくに付直に御送金被下度前金切に對しては嚴に發送を見合はせ候

銀鈴社

**繪葉書の交換を乞ふ** 俳句又は短歌等を記されたし直に他の繪はがきを以てお返しすべし

在滿州騎兵第二十聯隊第二中隊 竹内枯雄

**第二卷第九號既刊**

◉尾北の天地にワカバ有矣以て清新潑剌の美趣味を皷吹す!!

◉尾北の平蕪滿目たゞ平々凡々たるが中に一株ワカバの如何に濃綠にして生色あるかを見よ!!

◉尾北の文壇由來寂寞を嘆ずる久し是の渴を醫するは唯一ワカバあるのみ也!!

月刊文學雜誌 **ワカバ**

壹部金五錢。郵稅貳錢
六部郵稅共參拾五錢

發行所 尾張國一宮町 ワカバ會

杉浦朝武 増野翅白 合画

銀鈴創刊滿二周年 **紀念繪葉書**

「銀鈴」の欄畫に用ゐたるものを手際よく印刷し天馬、春光、清韻、愛美の四枚を壹組に包裝して發行せり、印刷既に成り、四枚各樣の色彩と趣致とを發揮す。江湖の清玩を待つ。

四枚壹組 實價五錢 社友一割引 郵稅貳錢

銀鈴社

銀鈴定價表

| 定價 | 郵稅 | 廣告料 |
|---|---|---|
| 一部 金五錢 | 金五厘 | 一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓 |
| 六部 金參拾錢 | …… | |
| 十二部 金五拾五錢 | …… | |

郵券代用壹割增

銀鈴第十五號

明治三十九年八月二十五日印刷
仝 年八月二十七日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二 編輯兼發行人 河野岩雄
仝 縣仝 郡川本村大字川本五三八 印刷人 原八太郎
仝 縣仝 郡仝 村大字仝 五三八 印刷所 邑智活版所

發行所 島根縣邑智郡田所村 銀鈴社